

「謙虚・誠実・実行」と刺繍されたネクタイをしめ、教頭生活をスタートさせた私であったが、1年目の秋頃に気付いたことがある。「謙虚・誠実・実行」だけでは足りない。「寛容」と「感謝」も必要だと。モットーが、「謙虚・誠実・実行・寛容・感謝」の5つに増えたことが、教頭1年目の収穫の一つだった。

いろいろな先生方がいる。寛容の心、許すこともできないと、なかなかやっていけないポジションなのである。また、新任教頭である私を誰もが「教頭先生、教頭先生」と呼んでくれる。教頭という役職名であって、教頭としての仕事ができているわけではない。それでも、それなりに立てていただき、気も使っていただける。感謝しながら、少しでも教頭として職務を全うできるように前に進むしかない。まわりの方々に支えられ、感謝しながらも、校長の意をくむことはできないまま教頭1年目が終了した私であった。

朝起きると冷蔵庫よりも寒い氷点下2度の世界を体験できる住宅で何とか冬を越し、教頭2年目を迎えた。この住宅には、一応の電化製品は持ってきていたが、テレビはなかった。敢えてテレビを置かなかった。「朝は早いし、帰りも遅いし、まあなくてもいいだろう」という思いと、「テレビがなければ本を読むはずだ」という計算があった。あの頃はスマホもなかった。これが大正解だった。

案の定、家に帰ってきて一人ではすることもなく、自然と毎晩本を読むようになった。どんな本かという、国語や教育一般に関する教育書ではなく、人生論や生き方、哲学、リーダー論などの分野であった。今までは読んだことのないジャンルである。自然とそういった本を買うようになった。これがよかった。3年もの間、毎晩読書に勤しむ生活は、いわば修行のようなものである。この3年間の読書が、その後に生きることになる。読書を通して、一流の人物を知ることができ、数多の名言にも出会うことができた。管理職に必要な「識見」を身に付けることにもたぶん役立ったことと思う。

これがもし、安易にテレビを持ち込んでいたら、きっと何も考えずに漫然とテレビを見て過ごすことになっていたであろう。実際、校長として再び単身赴任で教員住宅に住むことになったときは、テレビを買ってしまった。これは失敗だった。あれば見てしまうのである。2年間、ずいぶんと無駄な時間を過ごしてしまったように思う。校長とした赴任した先の教頭先生が「校長先生、テレビはあったほうがいいですよ」と言ったのである。今でも恨んでいる。

教頭2年目の9月に、南会津教育事務所の学校訪問が予定されていた。私はこれに命をかけたと言っても過言ではない。この当時の学校訪問は、授業や諸表簿はもちろんのこと、校舎、校地内の隅々まで見られるというものであった。生憎、檜沢中学校の校舎の各部屋にはマスターキーがなく、それぞれ別の鍵で開けるようになっていた。

教頭は、訪問者に付いてじゃらじゃらと鍵を持ち、言われた部屋の鍵を素早く見つけ、部屋を開けなければならぬのである。調理室や職員室の冷蔵庫の中まで点検された。賞味期限切れのものはないかを見るのである。調理室の包丁や技術室ののこぎりもポイントである。一つ一つに番号をふり、数を常に管理しておかなければならない。教頭2年目の夏休みは、この学校訪問のために全エネルギーを費やすことになった。

(次号に続く)